

REPORT to IAESTE JAPAN

- 第一部：研修報告
- 第二部：アンケート

氏名：	鎌倉 麗未	氏名の直筆署名：	
所属大学：	東京農工大学 大学院	学部：	農学府
学科：	応用生命化学専攻	学年：	1年
専門分野：	生化学、栄養生理化学		
派遣国：	フィンランド	Reference No:	FI/12/50
研修機関名：	Abo Akademi	部署名：	Fibre and Cellulose Technology
研修指導者名：	Jan Gustafsson	役職：	Accademic lecture
研修期間：	2012年 7月 30日 から 2012年 10月 5日 まで		

【事務局使用欄】

受領日：

第一部：研修報告

1. 研修の概要を1 ページ以内にまとめよ。

今回私はフィンランドの Turku という町にある Åbo Akademi の Fibre and Cellulose Technology 研究室で 10 週間研修を行いました。この地域はかつてスウェーデン領土だったこともあり、フィンランド語とスウェーデン語の二ヶ国語が使われている地域で、フィンランド語を主としている大学が Turku 大学、スウェーデン語を主としている大学が Åbo Akademi でした。しかし私の研修先である研究室に所属している人々は 10 カ国以上の国から来ており、普段の日常会話や研修を行ううえでの意思疎通はすべて英語で行われました。

この研究室では木材を砕いて得られる木片をさらに細かくして得られたパルプや紙の原料となるパルプを材料として、これらのパルプの活用性を広げる研究をしていました。研修当初に教授の先生と私の生活・実験をサポートして下さる方を交えて研修内容について話し合いました。その結果私の研修内容が今までこの研究室で行ったことのない反応を用いた実験を行うことになりました。その理由として、今までこの研究室には化学・物理系の人が多かった一方で私は生物系の勉強をしていたので、生物系よりの観点から研究を行ってほしいという教授の意向により新たな実験系を組んで研究を行うことになりました。そのため実験の情報を集めるために関連する様々な論文を読み、いくつかの実験方法を構築しました。この作業に数週間かかりました。その後再び話し合いをして研究目的に適した実験方法を選び実際に実験を行いました。具体的には、紙を製造する際に元となるパルプを構成するセルロースをより分解しやすくするために、セルロースの酸化をフェントン反応を用いて行い、セルロース表面のマイナスチャージを増加させてより分解しやすくするというものです。

まずは不溶性パルプをフェントン反応で酸化する作業を行いました。フェントン反応に用いる過酸化水素の濃度や触媒となる金属イオンの濃度、反応時間などは集めた文献を参考にし、これらの条件が異なるサンプルを 8 つ考えてすべての処理を行いました。必要となる溶液の調整から反応させてパルプを回収するまでに約1週間かかりました。その後得られた各サンプルパルプのセルロース表面に存在するマイナスチャージの量をメチレンブルー測定法を用いて測定しました。この方法はメチレンブルーがプラスチャージを帯びていることを利用して、サンプルパルプセルロースの表面に存在するマイナスチャージにメチレンブルーを吸着させてそのマイナスチャージ量を計算するという方法です。各サンプルにつき5-7種類の異なる量のメチレンブルーで処理することでマイナスチャージ量を計算しました。一日につき 1 サンプルずつ測定を行い、何度か再測定をするサンプルもありました。

この結果、フェントン反応による処理時間が長くその濃度が高いほどセルロース表面のマイナスチャージを増加させる傾向が確認できました。しかし今回の研修は 10 週間ととても短く、この実験系にはさらなる修正点が必要と思われます。実際にはフェントン反応による酸化処理時の pH 調整がすべてのサンプルで均等に行えざらつきが生じていることや、酸化処理後のパルプの回収方法、メチレンブルーによるチャージ量測定時のパルプ選出部位などです。これらの点を修正することでより正確な結果が得られると考えられます。

2. まとめとして、研修内容および派遣国での生活全般について 4 ページ程度で具体的に記述せよ。

(研修日誌、テクニカルレポートや単位認定用のレポートの内容を含んだもの。写真もあるとよい。)

今回私が研修で訪れたのはフィンランドのトゥルクという町です。トゥルクはフィンランドの中で南西端にありフィンランド最古の都市で、スウェーデン名を Åbo(オーボ)といいます。かつてスウェーデンに統治されていた歴史をもち、1812 年までフィンランドの首都であり、大教会・城・博物館・美術館など様々な歴史的建造物が存在しています。このような歴史からトゥルクでは様々な名前がフィンランド語とスウェーデン語で表記されており、この地域の人々はフィンランド語とスウェーデン語を話します。通りの名前や食品の表示などすべて 2ヶ国語で表示されていました。私の研修先である Åbo Akademi は名前からもわかるとおり、スウェーデン語を主として授業が行われる大学でした。同じくこの地域にあるトゥルク大学はフィンランド語を主として授業を行う大学です。実際にはフィンランドに住む人々はほとんどの人が英語を話



Turku 大聖堂

せたので、生活するなかでフィンランド語やスウェーデン語を話す必要はありませんでした。しかし買い物や家電の説明表記などのほとんどがこの二ヶ国語で書かれていたため、この点では少し困ることもありました。大学の近くにはトゥルク大聖堂(写真)がありました。これは古くからある聖堂でトゥルクのシンボルとなっており、夏の間は毎日多くの観光客が見学に来ていました。さらにこの大聖堂の近くにマーケット広場があり、特に休日は広場にたくさんのお店が並び果物や野菜・洋服など様々なお店が出て町の人が集う場所となっていました。研修当初は夏だったのでこのお店の数もかなり多く果物の種類もたくさんありましたが、研修終わりの 10 月頃には気候も寒くなってきたためお店や品数も減りました。

7・8 月は最高気温が 22℃前後の日が続きとても過ごしやすい気候でした。特に日本と違って湿度が低く日も長かったのでバカンスには最適でした。そのため様々な国から観光客が訪れていました。9 月に入ると徐々に気温が下がり 15℃前後となり、下旬には最高気温が 10℃に達しない日もありました。紅葉も見られどんぐりが落ちて秋を感じる風景となりました。日も短くなり夜 7 時過ぎには暗くなり始め雨も多くなりました。

研修先は Åbo Akademi にある Fibre and Cellulose Technology という研究室で木材からとれるパルプや紙の製造に用いられるパルプなどを材料としてパルプの活用性を広げる研究を行っている研究室でした。この研究室に



研究室(実験台)

所属している人々はかなり多国籍で、10 カ国以上の国・地域から来ていました。普段の研修は朝 9 時から夕方 4 時半までと日本と比べると短めの勤務時間でした。一日のなかで 10 時と 14 時にコーヒータイムという時間が設けられており、研究室の人は特に用事のない限りたいていこの時間になるとキッチンに集まりコーヒーや紅茶を飲みながら話していました。また一カ月のうち 2 日自分で自由に設定できる休日があり、みんな自由に設定して休日を活用していました。私は 7 月末から研修を開始したのですが、この時期はフィンランドでも夏休みにあたり、町や寮には大学生はほとんどいませんでした。研究室の人もそれぞれ一カ月ほど休暇を

とりそれぞれの夏休みを満喫していました。

研修開始最初の週はまず研究室内の設備を説明していただき、学校への研修生としての登録や銀行口座開設・税務署などに訪れて研修を開始するための準備を行いました。お給料が銀行振り込みだったため口座を開設する必要がありました。必要な書類などは研究室の方が作成してくださり、パスポートを持って行くだけで問題なく開設できました。

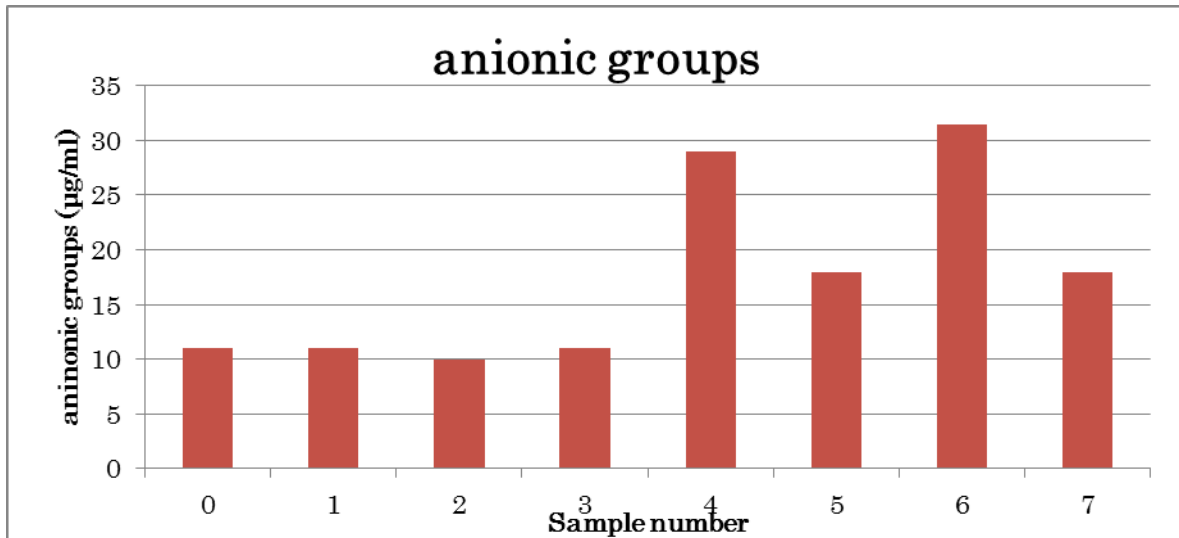
平日は研修が終わった後に生活用品や食料品を買って寮に帰るという生活でした。寮は研究室から歩いて 3 分ほどのところに位置しており、とても便利でした。7・8 月は日が長く夜 10 時近くにならないと暗くなりませんでした。トゥルクの町はかなり治安もよく生活していて不安に感じることはほとんどありませんでした。研修も夕方には終わるので早目に寮に帰り睡眠時間も十分にとれました。普段食料品を購入するスーパーは研究室から歩いて 5 分程度のところにあり、移動手段は基本的に徒歩でした。研究室を中心として必要な施設はすべて徒歩圏内にあり比較的便利な場所でした。週末は研究室の人と近くのテーマパークに出かけたり、デパートにショッピングに行ったり美術館などにも行きました。研究室の方が自転車を貸して下さったので、少し遠出でも十分対応できました。日本と異なっただけでなく研修先の研究室には学生が少なく、ポスドクの方が多くいたこと、秘書の方や物品管理を仕事としている方がいらしたことです。学生が少なかったのはこの地域に2種類の大学がありさらにもともと日本と比べて人口が少ないということが理由だと思いますが、研究室に所属している方の半分以上がポスドクの方で、残りの学生も博士課程の学生か修士課程を卒業して博士課程への進学前の方がほとんどで学部生と修士課程の人はいませんでした。

研修2週目に教授の先生と私の実験補助をしてくださる方を交えて話し合いをし、実験内容を決めました。前述しましたが最初の約1カ月はこの実験系を構築するために論文を読み、実験条件などを検討しました。その後実際に実験に取り掛かり約一カ月かけて当初予定していた実験を終えました。

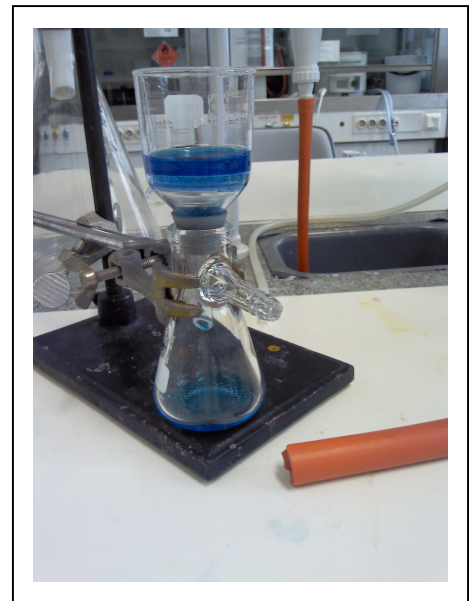
実際の実験内容に関する大まかな内容は前述しましたが、実験結果を以下に示します。サンプルは全部で 8 種類ありそれぞれの条件は以下の表のとおりです。

Sample number	[H ₂ O ₂] (%)	[FeSO ₄] (mM)	℃	pH	Time (h)
0	Untreated				
1	0	0	RT	4.5	2
2	0	0	RT	4.5	20
3	0.2	0.1	RT	4.5	2
4	0.2	0.1	RT	4.5	20
5	0.5	0.25	RT	4.5	2
6	0.5	0.25	RT	4.5	20
7	1.0	0.5	RT	4.5	2
8	1.0	0.5	RT	4.5	20

サンプル番号が増えるにつれて処理する試薬濃度が高くなっており、奇数番号のサンプルは 2 時間、偶数番号のサンプルは 20 時間処理しました。測定したネガティブチャージ量をまとめたのが次のグラフです。



この結果から、フェントン試薬によるセルロースの酸化処理によりセルロース表面のマイナスイオンが処理濃度および処理時間に依存して増加していることがわかります。このグラフにはサンプル 8 番の結果がありませんが、これはこの実験系の問題点により結果が信頼できないものとなったためです。具体的には、二つの問題点があげられます。一つ目は酸化反応中のpH 調整です。調整には希硫酸をもちいましたが、この調整はフェントン試薬を加えて混ぜたあとに行いました。しかし実際にはフェントン試薬の酸性度が高く、特に高濃度の試薬で処理したサンプル群では予定していたpHよりも低くなってしまいました。二つ目の問題点は、フェントン試薬処理の際に使用したパルプが溶液中に均等に広がらず、同じ処理をしたサンプルパルプ中でも部分的に酸化度が異なってしまったということです。これにより、パルプの一部を用いるメチレンブルー測定で結果の正確性が欠けてしまいました。研修期間内ではこの実験の再試行ができなかったのですが、実験方法の改善点を考え新しい方法を提案しました。新しい実験系では、まずpH 調整を行う際に使う溶液を増やすことを提案しました。今回の実験では希硫酸しか用いていなかったためフェントン反応を加えたことで低下したpH を目的のpH まで上げることができなかったため、新しい実験系では水酸化ナトリウム水溶液や水酸化カリウム水溶液などのアルカリ性溶液を用意してpH を調整することでより正確な実験結果を得られると考えました。さらに酸化処理を均等に行えるように、事前処理として一晩水の中にパルプをつけてパルプ繊維を広げ、さらにハンドミキサーやスターラーを用いて溶液中のパルプが均一になるように工夫することを提案しました。実際にはこの新しい方法で実験を行っていないので、問題点が解決できたかはまだわかりませんが、この実験を引き続き行ってくださるということなので、よりよい実験ができることを期待しています。研修の報告として最後の週に研修内容のプレゼンを行いました。教授の先生からはこの方法以外にもパルプへの化学物質による事前処理が有効であるかもしれないとのアドバイスをいただきました。



今回の研修では私自信にとってもそうですがこの研究室でも今までやったことのない研究に挑戦させていただき、本当に貴重な経験となりました。日本での環境とは全く違うなかで人とコミュニケーションをとって実験を行うことが研修当初は大変でしたが、自分のために時間を割いていろいろなことを教えて下さった皆さんの優しさや温かさに触れて感動しました。また自分の実験が今後皆さんの役に立てるかもしれないと考えると励みにもなりました。

フィンランドは隣国との交通手段が多くあり、国内の移動にも電車とバス、ヘルシンキではトラムが交通手段としてよく使われていました。とくにスウェーデン・エストニアにはフェリーや船がありこれを利用して小旅行に行きました。スウェーデンへは週末のフェリーで旅行しましたが、大型客船でとても素敵な船旅となりました。フェリーの運営会社は3社ほどあり団体のツアー客から個人の旅行客まで様々な人が利用していました。スウェーデンへのフェリーは昼便と夜便の2種類があり、フィンランド人はよくお酒や食事を楽しむためだけに乗ることもあるというほどでした。エストニアへのフェリーはスウェーデンからもありますが、私はヘルシンキからの船を利用しました。一日に8便前後ありとても便利でした。



エストニア(オレフ教会からの景色)

フィンランドは教育レベルの高さで有名ですが、今回の研修でその理由にすこし触れることができました。まずフィンランドは学費がすべて無料であるという点です。小学校から大学院まで学費がかからないため、教育格差が生じない環境にあります。もちろんそのぶん税金も日本よりは高いのですが、医療費も無料でこれは留学生にも適用されるため福利厚生が整備されています。次に仕事と家庭を同じくらい大切に考えており、残業や休日勤務といったことはまずなく、夕方早くから家に帰ることができます。もちろん仕事もきちんとおこなっていますが、家庭や家族を大切にする意識が高く、これは女性だけでなく男性も同様でした。家族と触れ合う時間をもつことを生活の中で重要であると考えているのです。また女性の社会進出という点でも他国に比べると進んでいます。また日常的に読む新聞にもあらゆる分野の情報が載っていて、実際私が研修中にも日本の映画に関する記事を見つけました。

こうした環境で研修できたことは実験技術の研修という点で多くのことを学ぶことができました。またそれだけでなく、今回の研修では日本以外の土地で初めて会う人々とコミュニケーションをとり生活するという貴重な体験をさせていただきました。研修当初は内向的な自分の性格のためにうまくコミュニケーションをとることができないこともありましたが、研究室の方々はとても優しく様々な面で協力してくださり本当に感謝しています。またこのような貴重な体験をする機会を与えて下さったすべての方々にも感謝しています。今後この研修での経験を活かしていきたいと思ひます。

第二部：アンケート

以下の質問にお答えください。

A. 研修内容について

1. 研修内容は、O-form に記載されていたとおりでしたか。(はい・いいえ)
「いいえ」と答えた場合、どこが違っていたか具体的に記述してください。

2. 就業時間は、O-form に記載されていたとおりでしたか。(はい・いいえ)
実際の就業時間： 全(362)時間
週(5)日間;(月)曜日から(金)曜日

3. 研修先から支払われた“滞在費”は、現地の通貨で週いくらでしたか。“滞在費”の内訳と日本円に換算した金額とあわせて書いてください。
週 174€ (日本円で約 1 万 7500 円)
内訳;家賃 約 100€、食費・生活用品 70€

4. 研修先から支払われた“滞在費”は、生活するのに十分なものでしたか。(はい・いいえ)
「いいえ」と答えた場合、何にいくらぐらい足りませんでしたか。

5. “滞在費”はどのように支払われましたか。(例:現金手渡し・銀行振込)
銀行振込

6. 研修中の滞在先について、宿舎の形態、周辺地域の環境や治安について詳しく記述してください。
学校の寮に滞在。大学から 100 メートルくらいとかなり近く、スーパーや銀行なども近くにあって便利な立地条件だった。また治安もよく夜 9 時くらいまで明るかった。寮は一人部屋で広さも十分ありトイレとシャワー、家具などがそろっていた。

7. 研修中の滞在先(宿舎)から研修地までの通勤について書いてください。(交通の便・手段・費用等)
徒歩 3 分

8. 研修先での職場環境(人間関係)は良かったですか。(はい・いいえ)
「いいえ」と答えた場合、不満だった点を書いてください。

9. 研修において、何か特別なプロジェクトに参加しましたか。(はい・いいえ)
「はい」と答えた場合、参加したプロジェクトの内容を詳しく記述してください。

10. 研修において、あなたの語学力(O-form に記載されている Required Language)は客観的に見て十分だったと思いますか。(はい・いいえ)
「いいえ」と答えた場合、どの程度不十分であったか、まだどう対策すべきと考えたかを書いてください。

自分の考えを英語ですぐに伝えることが難しかった。また、研修先の研究室は 10 カ国以上の国から人が集まっており、英語のなまりがそれぞれあった。日本ではイギリス人やアメリカ人のきれいな発音の英語しか聞きなれていなかったのも、慣れるまで聞き取れないこともあった。事前にいろんな国の人と英語で話し、自分の考えを英語で伝える練習をよくしていくとよいと思う。

B. 普段の生活について

1. 研修以外の時間(勤務時間後や週末)はどのように過ごしていましたか。

勤務後は買い物をしにスーパーに行ったりした。週末は旅行にでかけたりアクティビティーに参加した。自分で周辺の美術館や観光スポットに出かけたりほかの研修生と観光したりした。

2. 研修地でイアエステ委員会主催の催しに参加しましたか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた場合、参加したプログラムの内容とあわせて感想も書いてください。

3. 派遣国で、その国の伝統文化に触れるような機会がありましたか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた場合、どのようなものに参加したか、感想も詳しく書いてください。

フィンランドはサウナの発祥地であり、ホテルや寮にもサウナがついていたので利用しました。日本のサウナとほとんどかわりませんでした。またレストランではフィンランドの家庭料理といわれるミートボールを食べました。おいしかったです。全体的に味が濃かったです。

4. 派遣国の印象を、現地へ行く前と行った後のイメージの変化も含め、詳しく書いてください。

行く前は【寒い】というイメージがかなり強く、防寒着をたくさん持って行きました。気候以外では自然が豊かで人口密度が低く、のどかで優しい国というイメージでした。

実際に現地へ行き、7月・8月前半は夏だったのでそこまで寒くは感じませんでしたが、8月下旬から秋になり冷え込みが厳しくなりました。飛行機で最初についてのが首都ヘルシンキでした。ヘルシンキは人も多く、賑やかな町でした。研修先のトゥルクは昔の首都で、街並みが古くとても素敵な町でした。ヘルシンキに比べると人が減りますが、大学が2つあったので学生が多くいました。それでも日本の東京や新宿ほどの人はいなかったため、やはり人口密度が低い国ではありました。フィンランドの人はとても優しく、イメージ通りゆるやかな時間を過ごして家庭を大切にしている方が多かったように思います。

5. 研修国で、日本のことについて質問をされましたか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた場合、特に印象に残った質問、面白かった質問、あなたが返答に困った質問などがあれば、それにどう答えたかも含めて書いてください。

日本の人口や東京の人口密度、貿易輸入力などについて聞かれました。答えられなかった難しい質問などはされませんでした。

C. イアエステとの連絡

1. 研修出発前、手続き上何か問題がありましたか。(はい・いいえ)
「はい」と答えた場合、問題点を詳しく書いてください。

2. 派遣国への入国時に何か問題がありましたか。(はい・いいえ)
「はい」と答えた場合、問題点を詳しく書いてください。

3. 派遣国到着後、宿舎ならびに研修先へ自分ひとりで行きましたか。(はい・いいえ)
「いいえ」と答えた場合、誰と行きましたか。
研修先の研究室の人が駅に迎えに来てくれた。

4. 3で「派遣国のイアエステ委員会」と答えた場合、イアエステ委員会はどのように関与していましたか。
出発前から連絡を取っていたなど、分かる範囲で具体的に書いてください。

5. 研修初日、研修先の受入準備体制は万全でしたか。(はい・いいえ)
「いいえ」と答えた場合、何に不備があったか書いてください。

6. 研修前から研修期間中、派遣国のイアエステ委員会(事務局)は、どのように関与していましたか。
研修期間中、問題が起こったときに適切な対応もしくは助言をしてくれましたか。
研修前に何度かメールのやり取りをして、宿泊先の寮の手配をしていただきました。研修期間中もこまめに連絡が来て、研修先近辺や首都である催し物などを紹介するメールを受け取りました。

D. その他

1. 今回のイアエステ研修を通して、最も良かったと思うことを詳しく書いてください。

海外で自分の力を試す場を与えてもらったことが一番良かったです。自分でチャンスをつかんで自分の力で生活をするということは大変でしたが、何よりこうした場を提供していただけたことに感謝しています。研修に参加して今後の人生についても考えることがあり、日本では過ごすことのできない貴重な体験ができました。

2. 研修予定内容に関して事前に勉強をして行きましたか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた場合、何を勉強し、どう役立ったかを書いてください。

「いいえ」と答えた場合、事前に勉強をしなかった理由を記述してください。

研修先である研究室の教授が書いた過去の論文を探しそれを読んでいきました。どのような実験をしているか、最近の関心などがわかり役立ちました。

3. 研修終了時に、受入企業に研修レポート(Technical Report, Training Diary を含む)を提出しましたか。(はい・いいえ)

4. 日本出国前に準備しておいたほうが良いと思われることを書いてください。

現地に着いてからの移動手段。今年はルーマニアでの事件もあったので、来年からは特に女の子の場合、無理のない日程でできるだけ昼間に移動する渡航日程を考えておくべきだと思います。

5. 所持金やクレジットカード等、いくらぐらい・どのように持参されたか、また準備が十分であったかを書いてください。

所持金は現地通貨で 18 万くらい、日本円で 4 万円くらい持って行きました。またクレジットカードも一枚持って行きました。フィンランドは家賃が前払いでお給料が月末払いなので最初に家賃と一カ月分の生活費を自分で用意する必要があったため少し多めに持参しました。また電車のチケットを券売機で買う際は現金が使えずカードだったのでカードは一枚は必ず持って行ったほうが良いと感じました。

6. 日本から持参した物の中で、特に役に立ったもの、あるいは必要なかったものがあれば書いてください。

日本食は好きだったのでお米を持って行きました。現地でもお米を売っていたので、それほど持つ必要はなかったかもしれませんが、一番役立ったのはゆでたパスタにかけるソースです。自分がパスタ好きということもありますが、寮ではあまり調理がしにくかったので簡単に作れる食事が多く、なかでもパスタは手軽でよく食べました。しかしフィンランドにはゆでたパスタにかけるソースがほとんどなく、今後フィンランドに行かれる方はパスタソースを持っていくことをお勧めします。

研究室での研修でしたので、日本で使用している白衣を持参しましたが、貸してもらえたので持っていかなくてもよかったかと思います。

7. 来年以降、あなたが派遣された国へ、研修生として派遣される候補生に向けての助言を書いてください。(研修のことだけでなく、語学面や生活面など、気が付いたことはできるだけ詳しく)

フィンランドの研究室は日本の研究室とは全く異なります。もし企業でなく研究室へのインターンに行か

れるのでしたらそのことはまず頭に入れておくべきです。基本的に日本よりも研究室で過ごす時間が短いのです。これはコアタイムが短いことと、家族を大切にするという理由があるからだと思います。平日の勤務後自分で出かける計画などをたてるといいと思います。私の行った大学はありませんでしたが、大学によっては毎日のように研修生をアクティビティーに連れて行ってくれるところもあったようです。

研究室では基本的に英語で会話しましたが、スーパーなどに買い物に行った際や寮での生活は説明がすべてフィンランド語もしくはスウェーデン語だったのでこれが大変でした。また販売されているお肉などの量が多く、一人で食べるには大変だったのであまり調理をしませんでした。日本ではあたりまえのようにゆでたパスタにかけるソースがありますが、フィンランドにはそういったソースがほとんどなく、パスタを食べる習慣がある人は持っていくと便利だと思います。

フィンランドの夏は日が長く治安も比較的ほかのヨーロッパ諸国と比べていいので深夜に出歩くなどの行為をしなければ安全に生活できると思います。フィンランド語での買い物が大変だったので、ガイドブックなどの後ろに載っている、現地語で書かれた食べ物の名前のページを参考にしたほうがいいと思います。

8. 研修前と研修後で、自身の専門分野や国際理解に対する考え方に、どのような変化がありましたか？

今回の研修では日本での専門分野とは全く違うことをやりました。なので自分の専門分野に対する考え方という点ではあまり変化はありませんでした。しかし、研修先の研究室はかなり多国籍なところだったので、様々な国の人が外国の地で頑張っている姿に、自分も頑張ろうと勇気をもらいました。どの場所に行ってもそうだと思いますが、他人とうまく関係を築くには和を大切にしていってコミュニケーションをしっかりとることだと改めて感じました。

9. 今回の研修に参加したことで、海外への留学に興味を持ちましたか？すでに興味を持たれていた方は、その気持ちに変化はありましたか？

参加する前から今後の進路(就職か進学)について悩んでいましたが、今回参加して進学するなら海外の大学院に進学してみたいと思いました。日本の中で心地よい場所にとどまっていた自分成長するチャンスを逃している気がしました。チャンスがあれば積極的にそれをつかみにいく姿勢が今の日本の学生には足りないと感じました。まだ進学とはっきり決めたわけではないのですが、その選択肢も視野に入れて今後真剣に考えたいです。

10. 今後イアエステでの研修を考えている学生の方々へ、メッセージがあればお書きください。

自分を成長させることのできる素晴らしい機会となります。人生のなかでもこんなに貴重な経験ができるときはあまりないと思うので、ぜひ積極的に参加してほしいと思います。